縱筆三首 其二

元符二年（一〇九九）十二月、六十四歳　儋州に在っての作。

父老爭看烏角巾　父老 争ひ看る 烏角巾
應緣曾現宰官身　応に 曽て 宰官の身を現ずるに縁るべし
溪邊古路三叉口　渓辺の 古路 三叉口
獨立斜陽數過人　独り 斜陽に立って 過人を数ふ

【語釈】○父老…村ざとのおもだった老人。長者。○応縁…以下のような縁起、由来、があってなのだろう。○烏角巾…　隠者のかむる黒い頭巾。杜甫の詩に「錦里先生烏角巾」南隣。○宰官…政治を主宰するもの。観世音菩薩の現わす三十三身の一で、観音経、法華経などにみえる。

【解釈】土地の老人たちは、私のかむる烏角巾を争って看ようとする。私がかつて宰官の身として、うつそみをこの世に現したことがあるという縁起によるものでもあろうか。渓流に沿う古道の三叉路のところで、斜陽の中にひとり立ちつくして、通り過ぎてゆく人を数えている。

縱筆三首 其三

北船不到米如珠　北船 到らず 米 珠の如く
醉飽蕭條半月無　酔飽 蕭条 半月無し
明日東家當祭竈　明日 東家 当に竈 を祭るべし
隻雞斗酒定膰吾　隻雞 斗酒 定めて吾に膰せむ

【語釈】○北船…北の大陸から海南島への船便。○蕭条…ものさびしいさま。○東家…東隣の家。○祭竈…俗に送竈神という年末の行事。○膰…ひもろぎ。宗廟、社稷の祭りに供える火熟した肉で、祭りが終わると頒ち与えるもの。

【解釈】北からの船便が途絶えて、米は真珠のように貴重なものとなった。この半月がほどは、まことにわびしく、腹いっぱい飲み食いできた日はない。明日は東のお鄰で、かまどを祭るにちがいない。鶏肉とお酒のおさがりが、さだめしお頒ちいただけることだろう。

漢詩大系　蘇軾　近藤光男より抄出